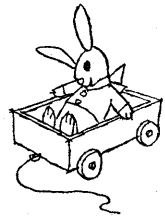


# 保育学の発展の必要

津 守 真



人間の発達に、幼児期が備えられていて、幼児という愛すべき子どもたちが、私どもの周囲に与えられているということは、私どもの人生にとって、大きな喜びである。それはまた広く、私どもの世界にとって、大きな喜びであり、よろこびである。

幼児は、やがて、六歳になり、七歳になり、八歳になると、次第におとなの生活をわきまえるようになり、おとなの生活をひどく乱さないで行動するようになる。しかし、それは、一面、おとなから一步離れた存在になって、自分を使いわけることができるようになったということでもある。そこに到達したときは、おとなと全くひとつになっていたところで学ぶべきことを終えて、次の段階へと踏み出す、人生の第二步でもある。

それに対して、幼児期は人生の第一歩である。三歳、四歳、五

歳、六歳のこの幼児にふれて、児童期といわれるその次の段階の子どもに接するのは異なった感じを、だれでも持つのではないだろうか。ことばではっきりと説明はできなくとも、まして、学問的に正確に表現することは困難であっても、幼児にふれたときに、児童にふれたときは異なった感じをうけることは事実であろう。ことに、幼児があらのままの姿で、自分を表出して活動しているとき、また、おとなを信頼して動いているとき、だれでも幼児らしい、さというものを感じるだろうと思う。このように感じるということは、たいせつなことである。それは、やがて、もっと洗練され、あるいは、もっと学問的な用語で説明されるようになるかもしれない。が、いまのところ、適切な表現のしかたがみつからなくとも、それが、ある、ということをはっきり意識しておくことは重要である。そうでないと、理くつをいっているうちに、だ

んだんと、幼児でも、児童でも、何でも同じだというような錯覚ができてしまうからである。人間としての素朴な感覚で、これが、あると感じたことは、多くの場合、たいせつなことなのである。

## 二

人生に幼児期があるということは、いろいろの点で意味のあることである。まず、それは、おとなと密接な関係のある時期である。親子の間に、心から親しみ合う気持が湧くのはこの時期である。幼児を主題にした名画をみても、それは、母親にまつわりついた姿である。母親から離れて決然として立っている姿ではない。幼児は親を信頼しきっているのである。

幼稚園の場では、教師は部分的に親の機能を果たしている。幼児は教師を信頼している。親密な関係を求めており、それが得られないと、不安であり、その場にとけこめない。おとなの側からいうならば、信頼にこたえ、親しみ合うことができるということとは人間として、なんと幸いなことであろうか。幼児との間の信頼は、うらぎられることがないのである。おとなは、幼児の求めるまなざしをうけとめなかったり、いいかげんに信頼に応じたりすることもある。しかし、幼児は、おとなのひと言、一動作、ひとつのまなざしによって、喜んだり、嬉しがったり、悲しんだり、不安になったり、怒ったりするのである。こんなに、人間として

率直に應じてくれる幼児に接する立場におかれているおとなは、人間として、何と幸せなことであろうか。

幼稚園は狭い世界であるという。他の社会から疎外されて、教師は不安をもつともいわれる。しかし、教師が幼児と親しい関係を結んでいけば、そこには、人間からの疎外はないはずである。

むしろ、他のいかなる社会よりも、人間らしい生き方のできる場所である。そして、幼児の心が、全世界の萌芽をふくんでいるように、幼稚園の精神的生活は、全世界にわたる広いものであると、思う。

第二に、幼児の発達からいうならば、幼児期は、感情の養われる重要な時期である。

幼児が物に熱心にとりくみ、没頭して仕事をやる態度や、自ら興味を発見し、それを追求しようとする感情は、幼児期に養われるものである。そして、集中し、没入して活動したときの満足感、幼児に活動する人生の楽しさを教えるものである。幼児の興味は、全世界そのものと同じくらい幅広い。そして、ひたむきに興味あるものに没入するときに、幼児は自分のもつ全能力をあげて、それを理解し、使いこなそうとしている。その幼児の興味に広さと深さを与えることができるかどうかは、幼児の生活に責任をもつおとなの手にかかっているのである。

人に対する感情も、幼児期にその基礎が養われる。友人に対して、親愛の感情をもつか、それとも憎しみをもつか、友人は、ただ競争相手にすぎず、自分の脅威になる存在であるにすぎないかあるいは、ともにたのしみ、ともに生活をわかち合うことのできる存在であろうか。他人がどのように感じ、何をしようとしているかを理解する能力は、幼児期から積み重ねられて、次第に成長していく能力である。それこそ、おとなから理解をもって扱われることを必要とし、他人との生活のひとつひとつの中で、子どもがおとなの保育的助けをかりて学んでいかなければならないことである。そうでなければ、幼児の感情は、自分中心に固着化し、いこじになり、他人を理解する心を養うことが困難になってしまう。ここには、数多くの保育研究の領域がある。

五歳のある女児があるとき、「あたし、幼稚園でも、おうちでも、おねえきんになったのよ」といって、にっこりと笑ってみせた。それは、自分の中に成長してきたいろいろの能力を、自分で使いこなせるようになったことに伴う感情の成長を示すものであろう。自分のもっている能力が十分に使われ、それを自分が統合し、統制することができるようになったときに、そこには、ゆとり、感情が生まれる。それは自己の成長にとって重要なものであり、さらにすすんで、物や人に意味のある接触をすることを容易にする。

このような感情は、幼児期から養われるものであって、将来に対する貯蓄のようなものである。幼児期にしっかりとそれが養われておくと、それにつづく発達を円滑にすることができる。

第三に、幼児期は、思考や行動の様式において、おとなの論理や秩序にしたがわれない、混沌の時期である。ピアジェらの知的機能や論理の発達の研究によっても、おとなのような論理的操作ができるようになるのは、五、六歳か六、七歳以降である。たとえば、一つのびんの中の水を、二つのびんにわけていれたときに、それは同量の水であることがわかるようになるのは、五、六歳である。そしてそこにいたる以前の段階としては、見かけは異なっても内容は同じであるという保存の概念がまったく欠除している段階から、その中間段階という順序を経なければならぬ。ピアジェは、これを成熟の機能によると考えているが、学者によっては、これは学習によって成立するものであるから、もっと早くこの過程を経過できるように、促進的対策を考えることが幼児教育であると考えている。

私は、幼児期には、まだ、おとなの論理や秩序が成立していないところに、むしろ積極的な意味があると考える。

せんべいをかじるのに、はしからたべるのではなくて、真中からかじろうとする二歳児。大きいびんに入れた水と、小さいびん

にいた水とは、ほんとうは同量であっても、同量と考ええない四、五歳児。おとなにとっては、そんなにあたりまえのことが、あたりまえと考えられないということは、それだけ低級なのではない。むしろ、そういうおとなの論理のない、混沌とした時期でなければ学ぶことのできないものがあるのではないだろうか。そのような時期でなければ、養うことのむずかしいものがあるのではないだろうか。

たとえば、おとなは思いつきもしないようなやり方で紙をつなぎあわせ、自分の頭に思い浮かべたものを実現しようと、夢中になって作っている幼児、そこでは何か、すばらしい思考力が養われつつあるのではないだろうか。論理的な思考形態がき上がってしまつたら、どうていやれないようなことを、幼児はやってのける能力をもっている。そして、これが本当の能力の発達に、重要な役割を果たすものとなっているのではないだろうか。

このような混沌の中でこそ、伸びるものを見出して、材料を与え、対話をかわしながら、励ましを与えていくのが保育者でなければならぬ。それには、幼児との間で発見されなければならぬ、多くの保育学上の課題がある。

幼児期を、早くに通過させて、早くおとなの論理に近づけようとする試みは、幼児の発達全体の立場からみると、たいせつなものを見落としているように思う。おとなのレベルまで到達して

しまえば、それで終りだというようなものではなくて、さらにそこから先に伸びていくようなものを、幼児期に養っていかなければならないのである。

### 三

保育学は、幼児の発達を保証するにはどうしたらよいかを考える学問である。その重要な部分が、幼児との対話の中で形成される。幼児とのふれあいそのものが、学問の資料としてとりあげられなければならない。

幼児教育の現場においては、ずいぶんすぐれた現場が実践されているのを、あちこちでみることができる。子どもはいきいきと活動し、それをのぼすような保育活動が行なわれているのを見るとき、そこに幼児と保育者との対話が行なわれているのを知る。

幼児保育においては、保育の実践がさきに進んでしまつて、これを学問的にすすめる面がおくれをとっているように私は思う。すぐれた保育者が、幼児との間で実践していることさらに、ほとんど光があてられていないのが保育学の現状である。

それに対して、幼児と保育者とはなれたところで行なわれる議論を、幼児保育の実践に反映させようとする、そこに保育の歪みが生じてくる。それが、心理学であろうと、教育学であろうと、幼児との対話をふくまないと、ところで作られた理論構成は、

保育学の外側の部分を形成するにとどまるものであろう。それはそれぞれ、独自の存在価値をもつ体系であっても、その立場から幼児をみるかぎり、一面的であることをまぬがれない。それが全面的に幼児保育のあり方をきめることはできないのである。最近の知的教育の主張、あるいは科学教育の主張、あるいはまた、目を転じて、豊教育における言語教育の主張など、いずれもこの類である。それが幼児に対して直接に効力をもつためには、幼児との対話の中に持ちこまなければならないのである。

しかるに、幼児保育の現状では、保育者と幼児との間で決定されるべき領域に、あまりにも強く、外側からの主張がはいりこんできている。そして、それが保育者と幼児との間の対話を妨げ、幼児の発達を妨害しているのをみるのである。

保育者のまわりには、幼児との間だけできめることを困難にするあまりにも多くの要因がある。幼稚園や保育園はこうするものだときめてしまっている伝統的な考え方、小学校に入るためにはこうしてもらいたいという親からの要求、上からきめられてくる行事計画など、それぞれの理由をもって主張をはじめると、保育者と幼児との間の発展的な関係を損う要因となってしまう。何らかの規準によってきめられたカリキュラム、日案などについても同様である。何かをしなければならぬ、ように感じさせる圧力、もっと何かを促進させなければ時代おくれになるかのように感じ

るあせり、論理化しなければならぬような気を起こさせる劣等感や術学性なども保育的関係を破ることにしか役立たない。

幼児教育における系統性の欠如ということがいわれたりするがその系統性が、たんに論理的な系列であったり、幼児の外にある規準を軸にした構造化であったりするならば、それは、かえって、幼児教育や幼児保育を損う働きしかならないことになってしまふ。幼児教育の系統性は、幼児との対話の中に求められなければならない。そのような意味での系統性の樹立こそ、幼児教育の体系化において、今後、求めなければならないものであり、それが保育学の中心的課題なのである。

すぐれた現場は、すでに数多く存在している。保育学の研究は、それをそのままとり上げればよい。また、すぐれた保育の現場は、どこにでも実現することができる。——幼児の最善の発達を保証することを考え、それ以外の外的な力に影響をうけないようにつとめて、幼児との間で決定していくようにするならば、そのような、保育者と幼児との間で行なわれることがら、それに関連して、幼児そのものの解明、保育者そのものの解明は、まだ研究の緒についたばかりの領域である。幼児教育の健全な発展のために、どうしてもつくり上げられなければならない学問領域として指摘したい。これは、保育者として参加すべき分野も大きいし、第三者の研究者として参加すべき分野もまた広い。